

資料館 だより

Miyako
Kitakamisanchi
Museum of Folklore

No.25

平成 31 (2019) 年

3 月 31 日発行

宮古市北上山地民俗資料館

〒028-2302 岩手県宮古市川井 2 - 187 - 1

Tel. 0193 - 76 - 2167 Fax. 0193-76-2933

<http://kitakamisanchi.city.miyako.iwate.jp>

◆小国分館が開所しました

H30. 6. 24

平成 30 年 6 月 24 日、当館小国分館が有形民俗資料の調査事務所として開所し、式典が行われました。開所を記念して、これまで小国分館の資料や活動についてご指導いただいていた元岩手大学人文社会科学部博物館学講師の名久井文明先生より「地域の宝 小国分館の民具」と題して講話をいただきました。小国分館は平成 17 年 3 月に閉校した旧小国中学校の校舎と体育館を活用した施設

です。現在、小国分館にはおよそ 7,000 点あまりの資料が収蔵されています。これには、平成 29 年度に旧墓目中学校体育館から移設して小国分館に集約された旧宮古市、田老町、新里村で収集された資料約 3,700 点が含まれます。今後は、市内全域から収集した有形民俗資料の保存管理を行い、資料整理や聞き取り調査を進め、成果を企画展や体験学習に活用していきます。

◆神楽共演会を開催しました

開所式の後、地元につながる江繋早池峰神楽保存会と末角神楽保存会（どちらも市指定無形民俗文化財）の公演が行われました。両保存会には、舞い込みを行って施設のお清めをしていただき、権現舞で参加者の安泰をお祈りしていただきました。また、演目のなかで餅まきをして開所を祝っていただきました。なお、餅まきでまかれた餅は当館ボランティア団体「小国分館友の会」の皆さんが作った地域に伝わる昔ながらのアワ餅です。

※小国分館は職員が常駐しておりません。所蔵する有形民俗資料をご覧になりたい方は、当館まで事前にお問合せください（☎0193-76-2167）。



名久井文明先生による講話の様子



小国分館友の会の皆さんによるアワ餅作り



末角神楽保存会による「舞い込み」(左)と江繋早池峰神楽保存会「鶏舞」で行われた餅まきの様子(右)

◆藁細工講座「ぞうり・わらじ作り教室」開催 4/4

10回目を迎えた藁ぞうり作り教室。10人の参加者が講師の湯澤孝さん、湯澤武さんのお二人から作り方を学びました。今回は郷土芸能でも使用するわらじの製作についても教わりました。前日には資料館の職員が藁打ちの作業を教わることができ、もの作りにおいて材料の準備がいかに大切かを考えさせられました。

布ぞうり作りの講座も好評をいただき、定員オーバーが続いたため、現在は年2回開催しています。7月8日と12月2日に合計25人の皆さんが講師の湯澤キヌ子さんと飯坂シワ子さんから作り方を教わりました。



わらじの作り方を教わる参加者



下の写真のように柔らかくなるまで丁寧に打つ



布ぞうりの作り方を教わる参加者

◆森の体験学習会を開催 5/29 9/27 10/4

かわい木の博物館分館9号「大樹の森」を見学し、昔の人々の自然との関わりや樹木利用の知恵について学ぶ「森の体験学習会」を開催しました。「大樹の森」は横沢冷泉とタイマグラを結ぶ大規模林道沿い、標高900m以上の場所にあります。あいにくの雨にみまわれた回もありましたが、それぞれ新緑と紅葉の美しさを堪能したあと、北上山地民俗資料館の展示を見学し、樹皮を使った小物作りの体験をしました。



案内人の武内寛さんから付近の自然について説明を受ける参加者

◆夏休み・冬休み工作教室 8/3 1/9

夏休み工作教室では昔この地域で行われていた紙漉き「閉伊川和紙」を伝承していきたいと活動している栗橋くみ子さんを講師に、小学生11人が和紙のカードを作る体験をしました。コウゾの樹皮を加工したり、紙を漉く作業のあと、紙を使った遊びも体験しました。



夏休み工作教室



冬休み工作教室

冬休み工作教室では、当館所蔵の民具に見られる技術を体験してもらおうと、豆腐を作ったり穀物を入れたりするのに使う「つの袋」の作り方で袋を作り、クラフトテープで作った平組みのミニかごを組み合わせたランチボックスを作りました。親子など6人が参加し、思い思いのデザインで仕上げました。

◆体験無料デーの取り組み

当館では「昔の技術と自然の素材で」をテーマに、小物作りの体験メニューを用意しています。今年度から、夏休み、冬休み、春休みの長期休みの期間に、それぞれ2日ずつの体験無料デーを設定しました。現在ある14メニューから樹皮を使ったミニかご作り、炭すごを作る台[すご編み台]を使ったコースター作りや、桶のたがの結び方をアレンジしたプレスレット作りの体験を行いました。夏休みには当館のサテライトがある「道の駅やまびこ」敷地内にある薬師塗漆工芸館でも出張開催しました。メニューの詳細は当館ホームページで紹介しています。詳しくは下記をご覧ください。



体験無料デーの様子

◆宮古市北上山地民俗資料館ホームページ

<http://kitakamisanchi.city.miyako.iwate.jp/>

当館が実施した事業の様子や、「資料館だより」のバックナンバーを掲載しています。体験メニューの詳細や国指定重要有形民俗文化財「北上山地川井村の山村生産用具コレクション」に指定された資料の実測図や写真も紹介していますので、是非ご覧ください。

◆石碑見学会「石工亀次を追う」 10/14

『宮古市の石碑 川井地域編』で報告されている「石工亀次」の銘がある石碑のうち、閉伊川流域にある11カ所20基をめぐる見学会を開催しました。「石工亀次」について詳しいことは分かっていませんが、施工された石碑は江戸時代末期のものがほとんどで、閉伊川中流から上流域の集落に多く残されていることが判明しています。参加者は市史編さん室の假屋雄一郎室長の解説を聞きながら、地域の歴史に理解を深めました。



「石工藤原亀次」（「亀」が絵柄になっている。鈴久名大聖玉串神社口の石碑の銘）



石碑を見学する参加者

◆当館ボランティアの活動

当館のさまざまな活動にご協力くださるボランティア団体「小国分館友の会」が発足して5年がたちました。この間、当館小国分館で行う活動についてのみならず、本館で行われる工作教室や体験学習のお手伝い、あるいはイベントなどさまざまな行事にご協力をいただいております。このほかにも雑穀試験畑の活動に加え、昨年度からは、展示解説についてもご協力いただき、団体で見学されるお客様や希望者に展示の解説のほか、昔の道具を使った実演なども行っています。

毎年テーマを決めて実施するボランティア研修会では、先進地視察として7月5日に北上市にあるみちのく民俗村と北上市立博物館を訪問しました。15名の参加者が、実際に展示解説を受けながら、ボランティア活動についての理解を深めました。他にも展示資料について理解を深めることを目的に、聞き取り調査を体験し、昔の道具について使用や製作について学ぶ学習会も開催しました。



ロープ一本で「肥背負い樽」を背負う実演（中村文男さん）



北上市立博物館で展示解説を受ける参加者

◆学校授業にご活用ください

当館では昭和30年代ころまでの暮らしや仕事で使われた昔の道具を中心に展示しています。平成29年度に開催した企画展「昔はどんな道具だったの？～教科書に登場する有形民俗資料～」をきっかけに、市内の学校へ積極的に利用を呼びかけています。今年度は市内から川井小学校、藤原小学校、山口小学校の皆さん、またフェリーが開通し、室蘭市みなと小学校の皆さんが来館しました。このほかにも、資料を持参して宮古小学校へ出前に行ってきました。

当館では小学校3年生の教科書で学ぶ、「昔のくらしの道具」について、子どもたちの、祖父母や父母の世代が子どもの頃に使っていた道具をそろえているほか、そうした道具を持参しての出前授業にも対応いたしますので、授業での利用を是非ご検討ください。



川井小3年生の皆さん（第三展示室、教科書に出てくる昔の道具展示コーナー）



藤原小3年生の皆さん（第二展示室、炉端コーナー）



山口小3年生の皆さん（第一展示室）



宮古小学校へ、教科書に出てくる昔の道具30点ほどを持参、3年生の皆さんに見ていただきました。



◆小国分館 水車の畑まつり開催 10/21

小国分館では寄贈を受けて移設した水車小屋や雑穀試験畑を活用し、郷土食の体験ができる「小国分館水車の畑まつり」を開催しました。「小国分館友の会」の皆さんが中心に活動しました。写真で紹介します。

水車小屋内部での作業。小国分館友の会ボランティアによる解説も行われました。



[臼]と[杵]を使い、アワの餅をつく様子。餅つきの体験も行いました。



つきあがったアワもちを手でちぎって試食用にしました。



小国分館友の会の皆さんが「布ぞうり」など思い思いの品を持ちより販売するコーナーもあまりました。



産直コーナーは地元の小国振興舎にご協力いただきました。



◆伝統的食文化伝承講座 12/7

郷土食「小豆ぱっとう」の作り方を教わる講習会を開催しました。講師は地元の郷土食グループ鈴久名こだま会の神楽栄子さんです。昔はムギの収穫時期に「七日日」という行事があり、無病息災を願い「7回はっとうを食べて7回水浴びをした」そうです。小麦粉で作るコシの強い短めのうどんを「はっとう」と呼びます。それを甘さをひかえめにした小豆の汁に入れて煮込んだのが「小豆ぱっとう」です。生地を寝かせている間に米粉の醤油団子の作り方も教わりました。



講師の神楽さんにコツを教わりながらはっとうを切る参加者

◆「どうやって使ったの？」

市社会福祉協議会かわいセンターのご協力で、川内集会所と蟹岡集会所で行われた高齢者の皆さんの集まりに昔の道具を持参してお話を伺ってきました。蟹岡集会所ではこのときの話が元になり、郷土食の「そばかけ」と「栗ぶかし」を作る集まりも開催され、当館でも記録に伺いました。ご協力ありがとうございました。



[ねこがき(背中当て)]を身に着ける様子

◆出前講座ご利用ください

当館で行う体験メニューは出前にも対応しています。今年度は浄土ヶ浜ビジターセンターや川井中学校の皆さんにご利用いただきました。メニューは当館ホームページなどで紹介していません。詳しくは当館までお問合せください。日程調整や材料の準備がありますので、事前にお問合せくださるようお願いいたします。



出前講座の参加者の様子

◆第21回企画展「移設資料展～森・川・海の民具～」開催 10/19～3/31

平成 29 年度に小国分館に移設した旧宮古市収集の資料のうち、主に沿岸部で収集された漁具や海辺の生活用具を中心に紹介する企画展を開催しました。

会期中の 11 月 9 日には、田老にお住まいの加藤伸一さんに来館いただき、展示資料について使用や製作に関する聞き取り調査を行うことができました。実際に漁業に携わっておられる加藤さんからは、漁具に使われる素材や材料の移り変わりの様子をお聞きすることができました。また、広い市域の宮古市では、同じ市内でも道具の形状や呼び名に違いがあるものがあることもわかりました。他にも、アンケート形式で資料についての情報を収集することができました。これらの聞き取り調査の内容は、資料個別にパネルを作成して追加で展示し、会期を 3 月 31 日まで延長して紹介しました。

当館ではこれまで、旧川井村を中心に山里の暮らしや仕事の道具を主に収集し、聞き取り調査を進めてきました。展示にあたって行った資料整理では、これまで収集されていない資料も収集されていることもわかりました。今後は宮古市の民俗資料館として、沿岸部で収集された資料についても整理しながら、聞き取り調査をすすめ、企画展や体験学習などの活用に向けた準備をしていきます。成果は企画展やホームページで紹介していく予定です。



聞き取り調査にご協力くださった加藤伸一さん。説明はゴモと呼ばれる海藻で作られた「腰みの」について。



漁具や船で使われた道具の展示の様子

◆入口案内看板を更新

国道 106 号線の沿線に立地する当館ですが、小高い場所に建っているため、道路から施設が見えにくく、どこにあるのか分からないというご意見を度々いただくことができました。このたび国道からの入り口に大きな案内板を設置しました。これにより、盛岡方面からお越しの方にも、宮古方面からお越しの方にも、それぞれ入り口がはっきり分かるようになりました。また、当館をご存知なくとも、看板をご覧になって気になって来館されたという方もいらっしゃると思います。これをきっかけにより多くの方々に見学していただけたらと考えています。



宮古方面からの国道入口

◆「宮古市役所」木製看板の活用

10 月 1 日にオープンした新庁舎「イーストピアみやこ」に、昭和 42 年まで使用されていた庁舎に掲げられていた木製看板が展示されています。これは平成 29 年度から旧宮古市収集の民具とともに小国分館で管理していた資料のうちの 1 点です。看板の裏面には揮毫者の氏名と「昭和 25 年 5 月 24 日」の日付が記されています。展示場所は正面ロビーの絵画の左側になります。



イーストピアみやこ正面ロビーに展示された木製看板

◆ご協力ありがとうございました!!

【資料寄贈】平成 30 年 4 月 1 日～平成 31 年 3 月 31 日まで
大森秋男様、大森ユキ子様、小向ユミ様、立花義光様、豊坂一寿様、中野新一様、中村哲様、中村文男様、名久井文明様、古館徳雄様、前川友宏様、湯澤武様

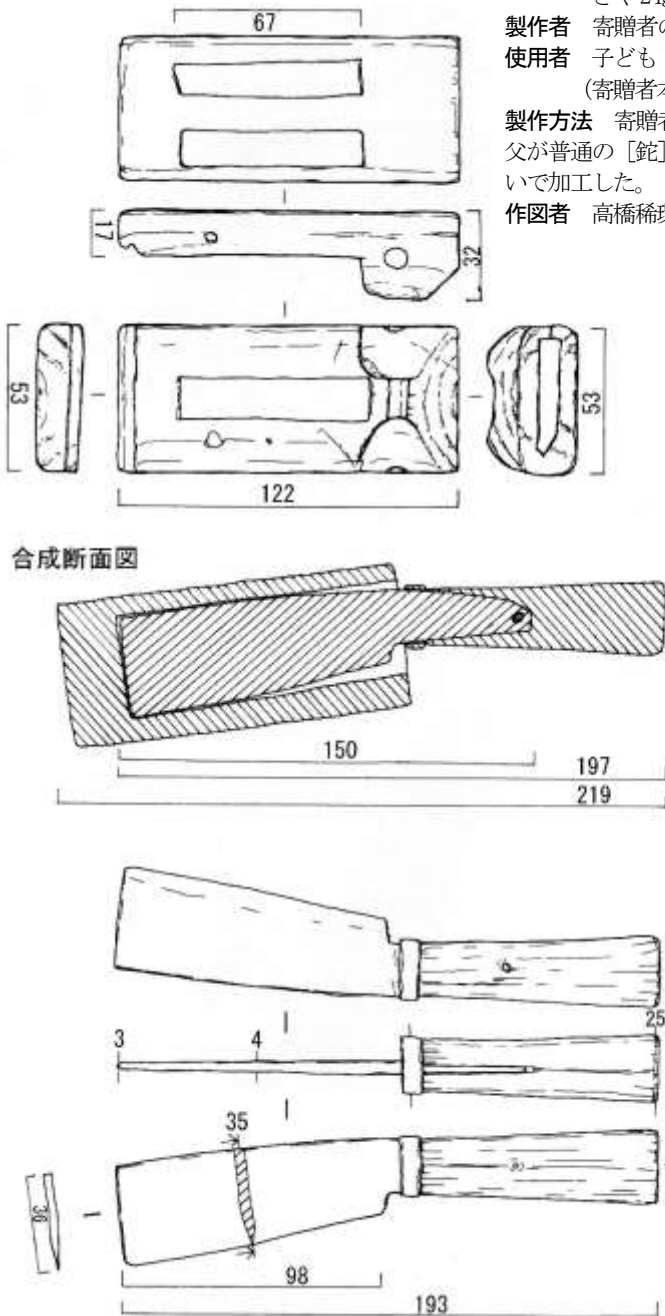
【資料調査】(同期間)
加藤伸一様、小向ユミ様、佐々木次雄様、中村文男様、湯澤孝様、湯澤武様、蟹岡集会所の皆様、川内集会所の皆様

◆平成30年度の入館者数 (人)

一般	学生	小・中・高	団体	合計
914	11	64	346	1,335



資料名 鉈 (No.2126)
 写真の上 (下の [鉈] は大人が使用のもの)
 寄贈者 豊坂一寿さん
 素材 キリ (さや)
 重量 本体 148g
 さや 24g
 製作者 寄贈者の祖父
 使用者 子ども (寄贈者本人)
 製作方法 寄贈者の祖父が普通の [鉈] を研いで加工した。
 作図者 高橋稀環子



合成断面図

子ども用の「鉈」

高橋稀環子

当館に一般的な大きさのちようど半分ほどの大きさの「鉈」が展示されています。寄贈者によると、「山が好きだった祖父が、孫である自分のために用意した鉈」だそうです。小学校にあがる前、一緒に山を歩きながら見様見真似で使ったものだったと思ひ出を話してくださいました。腰に結わえつける紐は失われていますが、大人が使うものと同じ「さや」がついています。木製の「さや」で、お祖父さんの手作りだそうです。さらにお聞きすると、「鉈」本体も、お祖父さんが大人用の小さなものを研いで作ったことが分りました。

かつて「鉈」は、山仕事るときはもちろん、薪とりや放牧地にウシを見に行くときなど、行く手をはばむ枝を払ったり、枝を削ってちよつとしたものを作ったりするため、山に入るときには必ず身につけた道具です。下の記事で紹介している「小正月の削り花」は「鉈」一本で作ります。オニグルミの若い枝をそくように薄く削ります。とても繊細な作業で、「鉈」の扱いに慣れていないと、難しい作業だと思います。寄贈者の思ひ出話から、山が今よりずっと身近だった時代には、子どもの頃から年長者に「鉈」の使い方教わる機会があり、次第に慣れていったのだろうと想像しました。また、そうした技術に加えて、山の樹木や植物に関する、さまざまな知識や知恵もあわせて伝えられていったのだろうと考えを巡らせました。

◆小正月の削り花作り同好会

小正月もだいぶ過ぎた3月20日に開催となりました。昨年度までの講習会で講師の湯澤孝さんから教わってきた技術を参加者同士で教え合う、同好会形式での開催となりました。参加者が作った花は、全員で大ぶりの枝に取り付けて、小国分館のロビーに飾り付けていただきました。今回は、資料紹介31で紹介した「鉈」の寄贈者も参加してくださいました。当館では「技術の伝承」を目的の一つとして活動しています。削り花を作る活動が継続して行われ、当館にとってはうれしい講座となりました。



「鉈」でクルミの枝を削る



ナラの枝に花を取り付ける